

# 栃木県中学校長会報

第113号

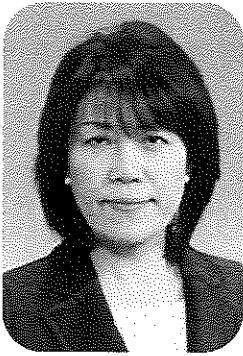
発行

平成24年2月7日

編集

栃木県中学校長会広報部

## 今年度を振り返って



栃木県中学校長会長  
宇都宮市立陽南中学校長  
高橋佳子

3月11日に発生した東日本大震災は、未曾有の被害をもたらしました。

栃木県中学校の校長先生方には、校舎等の損壊により他の学校や施設を間借りしての

授業実施、他校児童や生徒のための教室等の提供、安全な学習環境の整備や生徒の心のケア、他県から避難してきた生徒の就学受け入れや指導、放射能対策や安全計画の見直し等、ご苦労されていることと思います。改めて敬意を表します。

なお、本校長会として理事会で協議した結果、被災県への義援金30万円を日本赤十字社に送金させていただきました。一日も早い復旧復興を祈ります。

さて、平成22年6月に関東甲信越地区中学校長会第62回研究協議会栃木県大会が成功裏に終了し、今年度は、本校長会にとって新たなスタートの年となりました。私は会長を仰せ付かり、活動の3つの方針①情報の共有 ②小・高・関係機関との連携強化

③研修の充実・深化を提示させていただきました。校務多忙の中、総会や研修会、理事研修会、研究大会、6専門部会、12地区校長会等、熱心に活動に取り組んでいただき、大きな成果を残すことができました。特に昨年度の栃木大会の研究成果を各地

区・各学校で生かし、さらに実践を深めていかれたことは、大変意義あることと思います。今後も継続・発展させていきたいものです。

さらに、今年度は、新学習指導要領の移行措置実施、並びに次年度全面実施に向けての教育課程編成という重要な年でありました。学校5日制を維持しながら、授業時数増に対応するための環境整備、特色選抜の導入等の新しい高校入試の在り方等、本校長会としては県教育委員会を始めとする関係諸機関と意見交換しつつ、本会の考えを伝えてきました。

また、市町によっては、独自の新しい施策や課題への対応が学校に求められています。各地区校長会としても、積極的な意見表明を行ってきました。今後も、私たちの声を行政に反映させるべく、取り組んでいきたいと思っています。

私は栃木県理事として、関東甲信越地区及び全日本中学校長会に出席させていただきました。各都道府県の校長先生方の教育改革に果敢に取り組む姿勢、教育行政に積極的に意見を述べる姿勢に触発されること頻りでした。特に全日中役員の方々が、国に対して、各種調査やアンケート結果を活用しながら学校現場の実態や要望等を強く発信し、シンクタンクとしての役割を果たしていることには、敬服しました。教育という仕事の使命・責任・矜持というものを改めて深く認識した次第です。

最後に、非才な私を支えてくださった会員の皆様に心から感謝申し上げるとともに、次年度以降の更なるご協力をお願い申し上げます。

## 事務局だより

今年度4月の県理事会で、昨年3月に発生した東日本大震災における被災地等への支援について話し合わせ、県中学校長会基金から30万円を義援金として日本赤十字社へ送金することとなりました。

その理事会での決定に至る背景には、全日中からの情報や要請、金額や送金方法等については関東地区中学校長会との情報交換などがありました。

このように本県中学校長会は様々な面で、全日中

や関東地区中学校長会と連携を図りながら取り組んでいます。

全日中理事会での文科省等、国の最新情報・各都道府県の教育事情、また、関東地区理事会・事務局長会での関東地区研究協議会の在り方など、その内容を本県中学校長会理事会において報告したり、議題として提案したりしています。

全日中や関東地区の情報等が、本県校長共有のものとして今後生かされていくことを望みます。

(事務局長 後藤 明)

## ❖❖❖ 県教委との教育懇談会 ❖❖❖

広報部長 半田 全 孝  
(宇都宮市立姿川中学校長)

平成23年8月8日(月)、宇都宮市内のホテルニューイタヤにおいて、「県教委と小・中学校長会との教育懇談会」が開催されました。

小学校長会18名、中学校長会16名で臨み、県教委側は宇田貞夫教育次長様をはじめ22名の関係者に出席いただきました。中学校長会の高橋佳子会長、宇田教育次長の挨拶後、総務部長の佐藤 仁・宇都宮市立陽北中学校長が提案事項を説明しました。

### ◎中学校長会提案事項

- 1 現状を踏まえた教職員人材確保と教職員配置の改善
- 2 特別支援教育推進のための諸条件の整備
- 3 部活動の意義の再認識と充実のための諸条件の整備
- 4 中体連・中文連への補助の増額

今回は、新指導要領実施のための諸条件を中心に提案しました。県教委からは、各担当者が一つ一つの提案事項について、本県の現状や展望を示しながら丁寧にご回答いただきました。特に、新学習指導要領実施による授業時数増に対応できる教員の加配については、継続的国への要望や効果的な配置に努めることや、厳しい財政状況のなか、制度的諸問題等運動部活動の充実に努めていくことが認識されました。さらに、僅かな時間でしたが形式にこだわらない協議がなされ、有意義な懇談会でした。



## 県教委・県立高等学校長会との懇談会

進路対策部長 上野 武  
(塩谷町立塩谷中学校長)

平成23年10月14日(金)、栃木県教育会館において県教委、県立高等学校長会と公立中学校長会（正副会長、進路対策部長が出席）との懇談会が開かれました。次のような要望・提案をしました。

### 1 1日体験学習について

- (1) 各種大会と日程の重なりを避けて欲しい。
- (2) 同一地区の同一系列高校の日程重なりをできるだけ避けて欲しい。

### 2 入学者選抜方法について

- (1) 「特色選抜」の導入について詳細を知りたい。
- (2) 推薦入試の「推薦書」の扱いについて。
- (3) 募集定員に達しない高校での二次募集はないのか。

### 3 募集方法について

- (1) 推薦入試の合格発表から一般入試の願書提出までの時間をもう少しとれないか。

(2) 願書の郵送出願は可能にできないか。

### 4 その他の提案事項について

- (1) 入試細則の説明会をもっと早くできないか。
- (2) 一般入試「合格者一覧」のメール配信について。また、推薦入試の合格発表もメール配信にできないか。
- (3) 受検料のコンビニ等からの振込みは可能にできないか。
- (4) 「進路希望調査」のコンピュータ入力について。

やはり26年度導入とされる「特色選抜」等、新しい入試制度に対する質疑応答に熱が入りました。高校側が設定する資格要件などについては来年度末までには整えられるようにするなどのお答えをいただきました。また、1日体験の申し込みを全県下メールで統一する件についても、来年度実現の方向で準備するという結論に達しました。

今後も、県教委、県立高校長会との連携を密にして、相互の意思を率直に交換していきたいと考えます。

## 地区校長会だより

### 芳賀地区中学校長会

芳賀地区は、市町村の合併により、現在は真岡市、益子町、茂木町、市貝町、芳賀町の1市4町で17中学校をもって構成されています。校長会の組織も組織力を生かしたスムーズな運営が行われています。それぞれの校長が率直な意見を述べたり情報を提供するという風通しのよい組織体です。また、校長としての教養を深める目的で毎年中学校長会独自で講師を招き研修を深めています。今年度は3月11日の午後に発生した東北地方太平洋沖地震による被害を受けたこともあり、校長としての危機管理能力を磨く目的で、群馬大学大学院工学研究科社会環境デザイン工学専攻教授である片田敏孝氏をお招きして研修を深めました。先生は広域首都圏防災研究センター長としてあらゆる防災審議会の委員として活躍されている先生で話の内容もタイムリーで現実性が高く、思わず聞き入ってしまう内容でした。特に東日本大震災は三陸沖～宮城沖～福島沖～茨城沖の500km×200kmに渡る震源域でM9.0、津波の高さは三陸海岸各地で7メートルを超える津波で、旧田老

町では遡上高40メートルを超えた。死者・行方不明者が2万人を超え、死者の90パーセント以上が津波による水死。このような中、岩手県の小中学生の犠牲者率は、他県と比べて低かった。それは釜石の津波防災教育を進めて来た効果と思われる。避難3原則「想定にとらわれるな」「最善を尽くせ」「率先避難者たれ」津波防災教育=子どもを中心とした防災教育は10年経てば大人になり、更に10年経てば親になる。高い防災意識や災いをやり過ぎず恵が世代間で継承される。そこから地域に災害文化として根付いていく。「津波でんでんこ」の本質は自らの命に責任を持つこと、家族との信頼関係を築くことである。など大変興味深く、感心して拝聴することができました。

本校長会も次年度は県中学校長会研究大会で第2分科会「基礎基本」について発表することになっています。研修部長を中心に現在テーマをしぼり研究の方向性を確かめ、研究推進しているところです。芳賀地区校長会が仲睦まじく更なる会発展ができるよう今後更なる結束をし、活動していきたい。

[茂木町立茂木中学校長 澤村 悦男]

### 小山地区中学校長会

平成23年度2名の新任校長を迎え、新組織のもと市内11校の校長が新しい教育の流れに対応し諸課題の解決を図るために、連携して活動を進めている。

本市中学校長会は、平成18年度から4年間「小学校や地域と連携した学校経営」をテーマに研究を進めてきた。昨年平成22年度関東甲信越地区中学校長会第62回研究協議会栃木大会において研究を発表し、開かれた学校経営や学校情報の公開について成果を地区全体で共有することができた。

これまで継続研究してきたことを土台とし、今年度からは新たな課題として「小中一貫教育」を目指した研究をしていきたいと考えている。義務教育9年間で子どもの豊かな成長を目指すように小中連携した教職員の意識を改めて作り出したいと考えている。

そこでまず今年度は研究主題を「小中一貫教育を目指した学校経営」とし、小学校と連携をより深め

ていくためにそれぞれ中学校区で研究を進めてきている。激しい時代の変化とともに、新たな課題は山積みするものの、諸先輩や関係諸機関の支援によって積み重ねてきた成果を継承しつつ、各中学校区や市内全区で連携を取りながら、各校長自身が率先して見識を高め磨き、リーダーシップのもと着実な取り組みを進めていきたいと考えている。

時に教育改革の先端となり、時に教育の不易を踏まえ、我々は時代に相応した学校経営を展開し、リーダーシップを発揮しなくてはならない。そのためには、校長自らの教育の原点をもち、自信と誇りを持って教育を進めていく先導者でありたい。

「生命・心身の健康・安全なくして教育なし」我々校長も生身、身体と心の健康第一にして学校経営にあたりたい。

[小山市立桑中学校長 箕浦 良俊]

## 足利地区中学校長会

足利地区中学校長会は、市内中学校11校で組織されています。

中学校長会としての研修会は、年6回（4月・6月・9月・10月・12月・3月）計画されており、連絡事項・協議事項・情報交換・その他で構成されています。連絡・協議事項の内容は、県中学校長会関係（各専門部含む）、市中学校長会関係、中教研・中体連・中文連関係、生徒指導などの多岐にわたっています。

特に、後半に行われる情報交換は、各校が抱えている諸問題をみんなで意見を出し合い、検討し、共通理解を図っています。この情報交換は、学校経営上、大変役立っています。

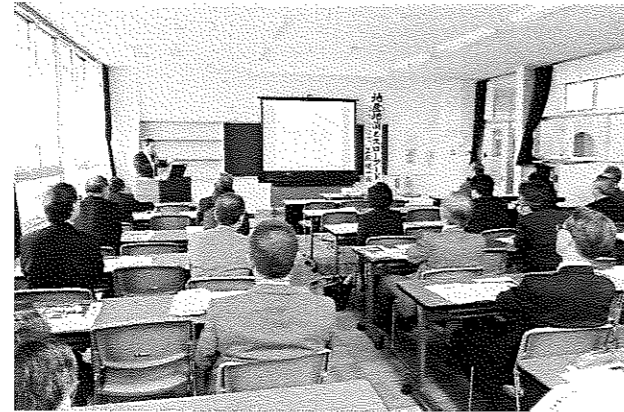
また、平成24年度の栃木県中学校長会研究大会において、足利地区は生徒指導に関する研究発表をひかえており、研修部員を中心に、発表に向けて研究推進を図っています。

さらに、年2回（8月・11月）、小中学校長会合

同研修会が行われます。今年度の内容は、学校の防災対策や足利市教育委員長の講話などでした。小中連携が大きな課題になっている昨今、小学校長会と連携を図りながら、中学校の教育活動に取り組んでいます。

今後も、足利市の中学校教育の充実・発展のために、会長を中心に11校が協力して、中学校長会の活動を推進していきます。

[足利市立坂西中学校長 岡野 信義]



今年度の小・中合同研修会

## 私の学校経営

### 表現力を育てる生徒活動

日光市立落合中学校長 小野 栄一

本校は、生徒活動を通して表現力を育てる教育を推進している。そのためには、どのような場でどんな表現力を育てるのか、表現力を分析し生徒活動の場を示した。

#### 1 本校の目指す表現力

- ① 言葉で伝える（コミュニケーション能力）  
自分の意見や考えを相手にわかるように順序よくまとめて伝える。
- ② 主体的行動で伝える（判断力と行動力）  
正しく判断したことを、誠実で前向きな行動で表す。
- ③ 礼儀を表す。  
自らを律し、相手を思いやる心に裏打ちされた言葉や行動で表す。

#### 2 表現力を育てる場

基本的にはすべての生徒活動であるが、運動会、文化祭の学校行事、生徒会活動、小中一貫教育、福祉ふれあい活動、緑が丘活動で取り組んでいる。

### 3 緑が丘活動（活動例）

本校は美しい林が学校を囲んでいる。地域からは「緑が丘」の愛称で呼ばれ、親しまれてきた。この林を核として、樹木を育て活用し、現在環境教育を進めている。緑が丘活動は多くの地域の学校支援ボランティアや地区の公民館の様々な団体の支援を受けて活動し、本校ならではの教育活動になってきている。



《植樹活動》

生徒活動は生徒の良さを引き出し評価することで、生徒の自信を生み出し前向きに生きようとする励みになっている。そしてそのことが表現力を高めることにもつながってきていることを職員が実感してきており、確かな手応えを感じている。

### 特色ある学校づくり

#### 「花と本と歌（詩）のある学校」

下野市立南河内中学校長 黒須 貞夫

本校は、平成6年に南河内第二中が分離し、大規模校から、小規模校となり、今年度は普通学級9、特別支援学級1、生徒数225名の家庭的な雰囲気をもつ学校である。

さて、南河中は特色ある学校づくりとして「花と本と歌（詩）のある学校」をテーマに長年にわたり様々な教育活動を展開し、本校教育目標の一つである「豊かな心を育てよう」の実現を目指し全校体制で組織的取り組みを推進している。

「花」については、環境向上委員会の生徒が中心となって花壇やプランターへの植栽・手入れや教室等へ生け花を飾るなどの活動に取り組んでいる。年間を通して「花」が身近にある環境の中で学校生活が送れるようにしている。

「本」については、毎朝10分の読書タイムを設定し、読書に親しんでいる。また、年3回のブックトークを学年ごとに設け、生徒が相互に推薦する本を紹介しあい読書への興味・関心を高めている。

「歌」については、学校祭で行われる合唱コンクー

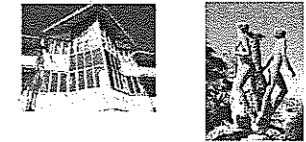
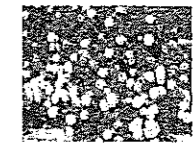
ルを中心に、それぞれの学級の生徒が力を合わせて取り組み、大いに盛り上がる伝統行事となっている。また、全校・学年集会時には校歌や行事に併せた全校合唱を実施している

「詩」についても、四季に応じて年間4回の俳句会を設け、さらに学校行事を題材にした俳句を詠んでいる。特に昨年「南花集」という花をテーマにした詩集を全校生徒・全職員で作成した。本年度は創立50周年を記念して第2集を発行し、全家庭に配布することができた。このような本校ならではの教育活動を通して、豊かな心を育み、勉強と部活動の両立を目指し、知・徳・体のバランスの取れた生徒の育成に日々力強く取り組んでいる。

平成23年度創立50周年  
下野市立南河内中学校俳句

## 南花集

### 第二集



### 「文武両道」の実現を目指して

大田原市立黒羽中学校長 高 信 洋 一

本校は昨年（平成23年）4月に、旧黒羽町内の川西中・黒羽中・須賀川中・両郷中の4つの中学校が統合して開校しました。

「自ら学ぶ生徒」（知）・「思いやりのある生徒」（徳）・「健康でたくましい生徒」（体）の三つを教育目標として、現在、開校2年目の学校経営に取り組んでおります。

本校の校区の大半は、かつて、黒羽藩の支配地で、江戸時代の文政3年（1820年）に、当時の藩主大関増業が、藩の学校（藩校）として学問所の「何陋館」を設置し、同時に「練武園」という武道場を設置して、藩士の子弟に、学問（文）・武芸（武）を、ともにかたよりなく精進させようとしてきました。

そこで、新しい黒羽中学校では、この故事から、「文武両道」の実現を、「学力づくり」（とくに基礎学力の定着のための努力）（知）と「体力づくり」（とくに運動部活動や体育への積極的な取り組み）

（体）を基盤に、思いやりのある豊かな「心づくり」（徳）の実践に努めることにしました。

イメージとしては、「学力づくり」（文）と「体力づくり」（武）を底辺とする三角形の頂点に、思いやりのある豊かな「心」を育て、知・徳・体の確固たる三角形を作ろうとするものです。

そして、学業・運動ともに優秀な成績をあげることが本来の意味である「文武両道」を実現できるように、本校の教職員とともに努力してまいりたいと思います。



平成23年9月4日(日) 第2回黒羽中体育祭より

## 新任校長の一言

### 人間関係力について

上三川町立明治中学校長 隅内和男

現在の児童生徒に欠けていることと問われれば、まず人間関係力であると答えると思います。少子化、過剰な平等意識、手厚すぎる保護等、その要因となることはいくつもあげることができます。

我々の育った時代には、否応なしの状況の中で、自然発生的に身についた人間関係力でした。世代年齢を越えた人間関係は、お仕着せの活動ばかりではありませんでした。広く生活全般、遊びの世界にも広がっており、先輩・後輩の縦の関係も、同世代・同年齢の横の関係も、その対処方法が自然に身に付く環境であったと思います。

今の児童生徒にも、登校班などで学年を超えた関係を学ぶ場面はありますが、充分とはいえません。テレビゲームなどを通して、多くの人と関係性を持つこともできるでしょうが、ここで体験できることは、機械を通しての関係であり、ゲームに取り組む人間同士の横の関係のみです。

では、このような状況の中で、人間関係力を培う方法はあるのでしょうか。

宿泊体験学習は、自然に親しみ、共同生活の中で

自立心や協力的な態度を涵養する活動として殆どの学校が取り入れています。しかしながら、1・2泊の共同生活で十分な効果を期待するには無理があります。それならば、思い切って否応なしの環境と状況を作り出すというのはどうでしょうか。例えば、小学校4年・5年の2年間を寮などで共同生活させるのです。洗濯や寝具の管理はもちろん、規則正しくゲーム機器からも切り離された生活をさせるのです。宿泊施設を筆頭にクリアしなければならない問題が山ほどありますが、「我が国の未来を委ねる人間を育てる」という確固とした目的をもった取り組みがなんとしても必要だと感じるのです。

2年間の寮生活など絵空事であり、夢物語だとの指摘は至極当然であると自覚していますが、国家なり自治体なりで思い切った施策がない限り現状を打破することは難しいということも事実です。

### 新任校長として

那珂川町立小川中学校長 青木敏之

本校は、東に八溝山系、北に遠く那須・塩原連山を臨み、那珂川町の中央を流れる那珂川の西部に位置しています。校庭には、本校のシンボルである「すずかけの木」が2本高くそびえ立ち、90年にわたり、生徒たちを見守ってきています。また、市町村合併前は旧小川町で唯一の中学校だったため、保護者や地域の方々からの期待や思いが大きく、多くの協力を得ています。

目指す学校像は、「生徒一人一人が小川中学校で中学時代を過ごしてよかった。」と思えるような学校です。そして、5かけの教育（目をかけ、声をかけ、心をかけ、願いをかけ、時間をかける）の実践を指導の基本に据え、学校教育目標の実現に向けて全職員で取り組んでいます。生徒数は、少子化の影響で10年前と比べると3分の2の181名です。生徒一人一人は素直で明るく、友だち同士仲良く楽しそ

うに学校生活を送り、学習や生徒会活動、部活動などの諸活動に一所懸命取り組んでいます。

私にとりましては二度目の勤務です。耐震工事、住民の願いだった新体育館の建設が終了し、これまでの伝統に加え、新たな出発となった年度の赴任となり、重みを感じています。幸い東日本大震災の影響も少なくスタートを切ることができました。縁あって本校に勤務することに感謝し、諸先輩の方々の御指導をいただきながら、教職員同士、地域の方々と関わり、明るく、楽しく、笑顔を忘れず未来を託す若者とともに過ごす喜びを共有し勤務していきたいと考えています。